振り付けに関する一考察
～バレエ「ロミオとジュリエット」より～

奥　野　知　加

1　はじめに

近代バレエの代表作「ロミオとジュリエット」は19世紀のクラシック・バレエの形式にとらわれることなく、それぞれの振り付け家が自由な発想と様式で独自のものを創作してきた作品である。中でもラブロフスキー版(ボリショイ・バレエ)とマクミラン版(ロイヤル・バレエ)は東西の雄として高く評価され[1]、人気を集めたもので、現在でも多くのバレエ団で上演され続けている。本研究ではこの両版の「バルコニー」のシーンに着目し、研究題材とした。この「バルコニー」のシーンは「ロミオとジュリエット」のハイライトとでもいうべき場面で、このシーンだけ独立した形でガラ公演などで頻繁に上演されており、振り付け家はまずこのシーンから創り始めるといわれている。今回は、このシーンにおける両版の振り付けの特色を知るために、それぞれの動きの内容と構成を明らかにし、比較検討を試みた。

2，研究方法

1,文献資料により作品の背景と上演の歴史を知る。
2,ＶＴＲ資料より両版の動きの内容（種類、実動時間、形態）を知る。

表１ 研究対象作品

カンパニー	音楽	時間	振り付け	初演の年	初演の年	出演
ボリショイ・バレエ	プロコフィエフ	380	L・ラブロフスキー	1965	1940	M・ラブロフスキー、N・ペスメルトノワ
ロイヤル・バレエ	プロコフィエフ	450	K・マクミラン	1966	1965	R・スレイテン、M・フォンテイーン

時間/sec

表２ 動きの凡例

記号 /	名称 /	説明	記号 /	名称 /	説明
pb /	パ・ド・ブーレ /	女性舞踊手のトウ立ちによる移動	a /	アダジオ /	ゆっくりとした動きの態様、バランス系のものも含む
r /	ランニング /	走る、リフトの前の助走など	l /	リフト /	女性舞踊手を持ち上げる、その型のもの移動を伴うものも含む
w /	ウォーキング /	歩く	m /	マイム /	クラシック・バレエのマイムを含む演技の態様
p /	ポーズ /	ポーズをとる	j /	ジャンプ /	各種ジャンプ
s /	ステップ /	ステップ各種	j&t /	ジャンプとターン /	ジャンプとターンのコンビネーション
t /	ターン /	回転、その型でのもの、移動のもの含む	sp /	サポート /	男性舞踊手が女性舞踊手を支える

3，結果と考察

(1) 作品の背景と上演の歴史

19世紀までにチャイコフスキーの三大バレエに代表されるような全幕物の物語バレエは、ペローやプティパらの手によってその様式が確立された。そして今日でもそれらは根強い人気を保ちながら数多く上演されている[2]。一方、今世紀に入ってから創られた「ロミオとジュリエット」は同じ全幕物の物語バレエであるにも関わらず、それまでのものとは様相を異にし、それぞれの舞踊作家が独自のスタイルを次々に打ち出すという展開をみせた。そして現在までに50数人の舞踊作家が多種多様な版を発表し（表３参照）また、作曲家もプロコフィエフやベルリオーズなど、十指に余る人がこれを手がけている[3]。（表3参照）

本研究の対象作品のラブロフスキー版は、初期の傑作と高く評価され、その後の同作品に多大な影響を与えたと同時に、あらゆる近代バレエの原点ともなる作品であるとされている[4]この作品の特徴は、物語と直接関係のないディベルティスマン[5]を廃し、またパ・ド・ドゥ[6]後のお辞儀も無くすなど、途中で作品を中断することなく純粋に物語を踊り上げるスタイルに仕上げられていることである。このことは、今でこそ特別なことではないが、当時のそ

れまでのバレエダクション方式からすると大変画期的なことであることがわかる。そして、それ以降発表された同作品は、このラブロフスキー版を如何に超えるか[7]を最大の課題として創られていったといわれている。

一方、マクミラン版「ロミオとジュリエット」は、ロイヤル・バレエのケネス・マクミラン振り付けによる全幕物であるが、ラブロフスキー版より25年後に発表され好評を博した[8]。当時のマクミランは19世紀のクラシック・バレエを革新すべく精力的に創作活動を行なっていた。この作品がラブロフスキー版以来の傑作といわれた所以は、当時ゴールデンコンビといわれたフォンティーン、ヌレエフという恵まれた主役に因るところもあるが、それよりもマクミラン独自の解釈による、ジュリエットに焦点を当てた見事なダンスドラマの展開と、形式にとらわれない表現力豊かなアンシェヌマン[9]が見る者の心を強く打ち、高く評価されたものと考える。

上演の歴史は表３の上演リストに示したが、今世紀の名作に相応しく数多くの有名な舞踊作家が独自の版を発表し、現在までに50数版を数える。同一の戯曲でこれほど多くの作品が作られる例はほかに見ることが出来ない。中でも著名な作品は、1926年のディアギレフのバレエ・リュスによるニジンスカ版で、時代設定も主役の役柄も現代風(当時の)に大幅に変えられ、また幕間にバランシンの間奏曲が挿入され、ミロとエルンストが美術を担当するなど、かなり先駆的な作品であったことが推察される。次いで1940年のラブロフスキー版、1943年のチューダー版、1955年のアシュトン版と話題作が続き、特にチューダー版はパ・ド・ドゥまでも大胆にカットした一幕ものとし、初演の時点で未完成であったことでも有名である。1957年のロビンス版はミュージカル「ウエストサイドストーリー」としてバーンスタインの曲と共に話題を呼び、1958年のクランコ版は65年のマクミラン版と同様水準の高い作品とされ、現在でも多くのカンパニーで上演されている作品である[10]。1966年のベジャール版は、原作のイメージからかなり離れた社会派の作品として独自の境地を発表している。その他1971年のノイマイヤー版、77年のヌレエフ版、78年のグリゴロービッチ版と70年代の話題作が挙げられるが、中でもグリゴロービッチ版はラブロフスキー版と好対照な作品として同じボリショイ・バレエ団のレパートリーとなった程である。最近では、1990年にヌーベルダンスの雄、プレルジョカージュによる「ウエストサイドストーリー」のバレエ版とでもいうべき斬新な作品が発表され、注目されている。以上のほか世界各国のバレエ団で現在もなお独自の「ロミオとジュリエット」が創られ、上演され続けており、おそらく今後もいろいろな新作が生まれ続けるであろう。この様に、この作品が永遠のバレエ主題として生き続ける大きな要因の一つは、台本であるシェイクスピアの有名な悲恋戯曲がバレエという表現芸術と結びつくことで、その物語の感傷性が美しさと共に一層増幅され、見る者の心を強く掴んだからであろう。また、もう一つの要因としては、使用音楽が挙げられる。多くの作家がプロコフィエフ版を使用しているが、全52曲から成るこの音楽は、優美な旋律の部分や不協和音の部分、穏やかなリズムのところや激しいリズムのところ、またそれらが入り混じったものなど、複雑な構成になっている。そして、それらの一曲一曲が登場人物の情緒の変化と深く結びつき、その人間像を明確に描き出すはたらきとして功を奏し、それまでのクラシック・バレエ曲の、甘美なメロディー一辺倒のものとはかけ離れた斬新な魅力を持つ音楽であった。以上のようなことが、多くの振り付け家を創作へと駆り立てた要因となっているものと考える。

(2) 動きの内容

それぞれの版の動きの内容を12の運動群に分類し、その表出実動時間(秒)を作品ごとにトータルしたものが表４である。両版は同一の曲であるが演奏の遅速と編集によって70秒の差があったのでパーセンテージ換算し比較してみた。これによるとラブロフスキー版では、ポーズ(p)が22%以上で最も多く、次いでリフト(l)の15%、サポート(sp)13%の順であった。同版で逆に少ない運動群は、パ・ド・ブレ(pb)2.6%、ターン(t)2%、各種ステップ(s) 0.8%、となっていた。マクミラン版では最多がマイム(m)で

表3－1　主な上演リスト

年	振付	音楽	カンパニー	ロミオ	ジュリエット
1926	B・ジニンスカ G・バランシン	C・ランバード	ロシア・バレエ団	S・リファール	T・カルサヴィナ A・ニキーチナ
1938	プリッタ	プロコフィエフ	チェコスロバキア国立バレエ		
1940	L・ラヴロフスキー	プロコフィエフ	キーロフ・バレエ団	G・セルゲイエフ	G・ウラノワ
1942	S・リファール	チャイコフスキー	サル・プレイエル	S・リファール	L・チェリーナ
1943	A・チューダー	F・デリウス	アメリカン・バレエ・シアター	H・レイング	A・マルコワ N・ケイ A・アロンソ
1946	L・ラブロフスキー	プロコフィエフ	ボリショイ・バレエ団	M・ガボヴィッチ	G・ウラノワ
1946		チャイコフスキー	モンテカルロ新バレエ団	S・リファール	Y・ショヴィレ
1948	T・グスフォスキー	プロコフィエフ	ドイツ・ベルリン・ オペラ・バレエ団	G・ラインホルム	N・トロフィモワ
1949		チャイコフスキー	パリ・オペラ座バレエ団	A・カリウジニー	Y・ショヴィレ
1949	G・スキピン	チャイコフスキー	クエバス・バレエ団	G・スキピン	E・バガワ
1950	B・バルトラン	チャイコフスキー	王立デンマーク・バレエ団	E・ブルーン	M・ヴァンサー
1955	A・ロドリゲス	プロコフィエフ	スカラ座バレエ団	G・ベルジーニ M・ピストーニ	V・ヴェルディ O・アマティ
1955	F・アシュトン	プロコフィエフ	王立デンマーク・バレエ団	H・クロンスタム E・ブルーン	M・ヴァンサー K・シモーヌ
1955	S・リファール	プロコフィエフ	パリ・オペラ座バレエ団	M・ルノー	L・ダイデ
1957	J・ロビンス	L・バーンスタイン	ブロードウエイ	（ウエスト・サイド物語）	
1958	J・クランコ	プロコフィエフ	スカラ座バレエ団	M・ピストーニ	C・フラッチ
1959	W・ウルブリヒト	プロコフィエフ	シュツットガルト・バレエ団	R・パラ	X・パレー
1964	J・クランコ	プロコフィエフ	カナダ国立バレエ団	R・パラ	M・ハイデ
1965	K・マクミラン	プロコフィエフ	ロイヤル・バレエ	R・ヌレエフ	M・フォンテーン
1966	E・ブルーン	プロコフィエフ	テアトロ・デル・オペラ・ バレエ団	E・ブルーン	C・フラッチ
1966	M・ベジャール	ベルリオーズ	20世紀バレエ団	J・ドン	H・アサカワ
1967	A・ラピス	プロコフィエフ	パリ・オペラ座バレエ団	A・ラピス	C・ヴラッシ
1968	J・クランコ	プロコフィエフ	スカラ座バレエ団	A・ラピス	C・フラッチ
1968	J・クランコ	プロコフィエフ	ミュンヘン国立オペラ・ バレエ団	K・クラウス	K・ヴェルノン
1969	B・クルベール	プロコフィエフ	クルベルグ・バレエ団	M・エク	L・ウエナーグレン
1969	R・ペイジ	チャイコフスキー	シカゴ・バレエ団	G・ラインホルン	Y・ショヴィレ
1969	L・チェルニチョフ	ベルリオーズ	キーロフ・バレエ団	A・グライエフ	I・コルパコワ

表3－2　主な上演リスト

1969	A・アロンソ	A・バスケス、その他	キューバ国立バレエ団	A・プリセッキー	A・アロンソ
1970	G・スキビン	プロコフィエフ	コロン劇場バレエ団	J・ネグリア	O・フェリー
1970	V・ピアジ	プロコフィエフ	リヨン・オペラ・バレエ団	V・ピアジ	D・ボールドウイン
1971	J・ノイマイヤー	プロコフィエフ	フランクフルト・オペラ・バレエ団	J・ノイマイヤー T・フィニー	サマロブーロ M・クルーゼ
1971	M・クラ	プロコフィエフ	プラハ・オペラ・バレエ団	V・ハラベス	
1972	L・ヘフゲン	ベルリオーズ	ボン・オペラ・バレエ団	P・ウインボルト	
1973	F・アシュトン	プロコフィエフ	ロンドン・フェスティバル・バレエ	P・シャウフス	G・フルトン
1973	V・スクラトフ M・サンテステヴァン	プロコフィエフ	グラン・テアトル	G・ビレッタ	W・ビオレ
1974	J・クランコ	プロコフィエフ	オーストラリア・バレエ団	K・コー	L・アルドウス
1974	J・ノイマイヤー	プロコフィエフ	ハンブルグ・バレエ団	J・ノイマイヤー T・フィニー	M・クルーゼ
1974	J・ノイマイヤー	プロコフィエフ	王立デンマーク・バレエ団	I・アンデルセン	M・I・カーク
1975	J・クランコ	プロコフィエフ	グラン・テアトル	R・クラガン	M・ハイデ
1975	R・ファシーリャ	プロコフィエフ	トリノ・オペラ・バレエ団	J・ウルバン	C・フラッチ
1977	A・アレイズ	プロコフィエフ	ジョフリー・バレエ団	K・マッケンジー	L・スラージ I・フラリー D・ジャクソン
1977	R・ヌレエフ	プロコフィエフ	ロンドン・フェスティバル・バレエ	R・ヌレエフ	E・エフドキモワ
1978	Y・グリゴローヴィッチ	プロコフィエフ	パリ・オペラ座バレエ団	M・ドナール	D・カルフーニ
1979	Y・グリゴローヴィッチ	プロコフィエフ	ボリショイ・バレエ団	A・ボガティリョフ M・ラヴロフスキー M・リエパ	N・ベスメルトノワ N・コンドラティエワ
1980	J・ルフェーヴル	ベルリオーズ	ワローニ・バレエ団	A・コパクス	M・マルチネス
1980	R・ヌレエフ	プロコフィエフ	スカラ座バレエ団	R・ヌレエフ	C・フラッチ
1981		プロコフィエフ	ヤング・クラシック・バレエ	S・イサイエフ	M・ベルクン・ベベシッチ

―― 不詳

33%以上、次いでリフトの約22%とこれらで過半数に達している。少ない運動群は、ジャンプ&ターン(j&t)1.8%、パ・ド・ブレ(pb)1.7%、ステップ(s) 0.9%であった。これらによるといずれも、バレエ特有の動きポーズ(p)、リフ ト(l)、サポート(sp)などが目だっているが、例えばロミオが踊るパートでは、ジュリエットはその間ポーズのまま動かなかったり、アダジオ系の動きの場合は必ず男性がサポートしている動きまでトータルされており、それらが上位を占める結果となってることがわかる。このバレエのパ・ド・ドゥ特有の踊りの形態を鑑み、その場の踊りの内容からどちらの動きが主体であるかを判断し、作品構成上の動きの内容としてまとめたものが表５である。そして、それをもとに実動時間を、主体になる踊りの形態、ロミオの動き、ジュリエッの

表４　役柄における動きの内容

	ラブロフスキー版					マクミラン版				
運動型	ロミオ	ジュリ	トータル	%	順位	ロミオ	ジュリ	トータル	%	順位
pb	−	20	20	2.6	10	−	15	15	1.7	11
r	26	58	84	11.1	4	22	50	72	8.0	3
w	22	26	48	6.3	7	24	16	40	4.4	7
p	74	98	172	22.6	1	28	42	70	7.8	5
s	6	−	6	0.8	12	−	8	8	0.9	12
t	11	4	15	2.0	11	16	13	29	3.2	8
a	−	78	78	10.3	5	−	52	52	5.8	6
l	58	58	116	15.3	2	98	98	196	21.8	2
m	14	18	32	4.2	8	146	156	302	33.5	1
j	40	20	60	7.9	6	28	−	28	3.1	9
j & t	29	−	29	3.8	9	16	−	16	1.8	10
s p	100	−	100	13.1	3	72	−	72	8.0	3
トータル	380	380	760	100	−	450	450	900	100	−
単位	sec	sec	sec	%	位	sec	sec	sec	%	位

表５　作品構成上の動きの内容

動き	pb	r	w	p	s	t	a	l	m	j	j&t	トータル
ラブロフスキー版	20	50	20	54	−	15	78	58	16	40	29	380sec
	5.3	13.2	5.3	14.2	0	3.9	20.5	15.3	4.2	10.5	7.6	100%
	7	4	7	3	11	10	1	2	9	5	6	順位
マクミラン版	15	44	12	22	8	29	52	98	126	28	16	450sec
	3.3	9.8	2.7	4.9	1.8	6.4	11.6	21.8	28.0	6.2	3.5	100%
	9	4	10	7	11	5	3	2	1	6	8	順位

表６　踊りの形態による実動

動きの形態	ラブロフスキー版		マクミラン版		地 故
ロミオ	76	20	66	15	
ジュリ	34	9	34	8	
joint	228	60	260	58	
separ	42	11	90	19	
トータル	380	100	450	100	ジュリ/ジュリエット
	sec	%	sec	%	joint/組んで踊る

separ/separateの略、別々に踊る

動き、二人が組んで踊る(joint)、別々に踊る(separate)、にまとめたものが表６で、表５、表６をあわせて作品の流れを図式化したものが図１である。

表５よりそれぞれの版の動きの傾向をみると、ラブロフスキー版ではアダジオ系(a)が20%、次いでリフト(l)、ポーズ(p)、ランニング(r)、ジャンプ系(j)とほぼ同じ割合(15%前後)で使用されている。一方マクミラン版では、マイム m)とリフト(l)で50%を占め、アダジオ系(a)11%、ランニング(r)9.8%が続いている。ラブロフスキー版がいろいろな動きを均等に使用しているのに対し、マクミラン版はマイムとリフト中心の動きで構成されていることがわかる。

表６より、どちらの版もジュリエットの動きが主軸の作品構成であることがうかがえる。つまり、組んで踊る(joint)パートの内容はリフト(l)若しくはアダジオ系(a)の動きであり、これらは全てジュリエットの動きを強調するための動きの形態と見なすことができる。従ってジュリエットのパートは、ラブロフスキー版で69% マクミラン版で66%、がこれに相当することとなる。その他、ロミオのパート、別々に踊る(separate)パートとも両版ほぼ同じ割合であり、全体を通して、踊りの形態の使用頻度については、両版とも大きな相違はないものと見なせよう。

図１　作品の流れ

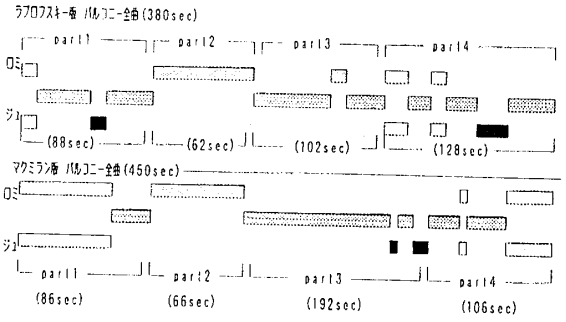


図２　part1の動きの構成

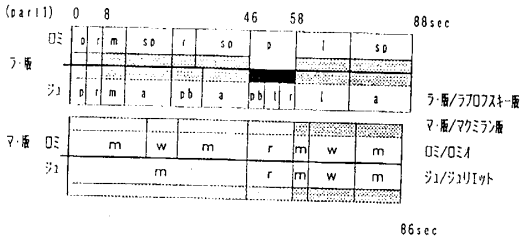


図３　part2の動きの構成

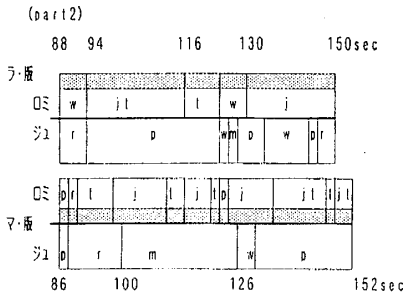


図４　part3の動きの構成

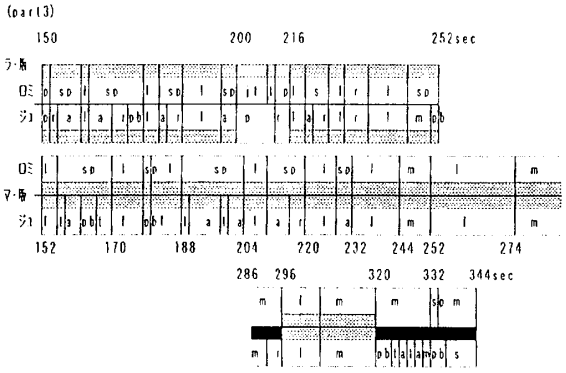
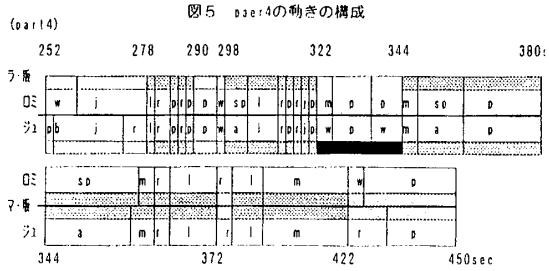


図５　part4の動きの構成



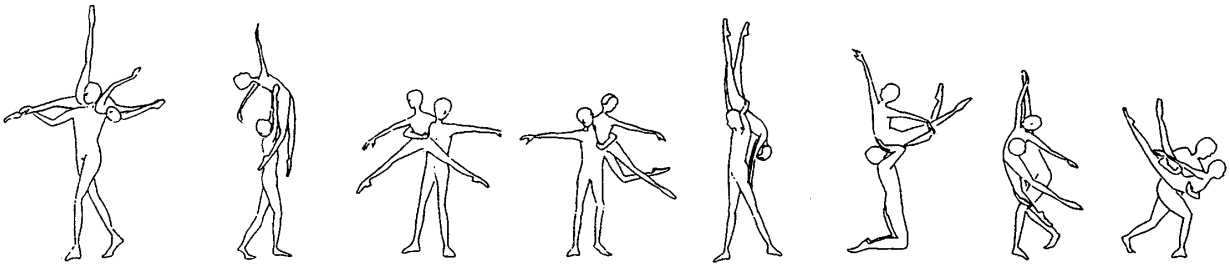
また、図１は曲の構成と踊りの形態の変化を図に表わしたものである。この曲は全体を4つのパートに聞き分けることができる(part1～part4)。その内訳は、part1は、静かで穏やかな曲相ではじまり、part2は少し力強い感じに転じ、part3で起伏の激しい旋律が盛り上がりを感じさせ、part4で再び穏やかで静かな感じに戻り終わる、という明快な起承転結型である。但し、マクミラン版のpart3は同じフレーズが2度繰り返えされているためにその部分の時間が加算されて多くなっている。これを踏まえて全体の踊りの形態の展開をみてみると、part1以外は踊りの形態がほぼ同じであることがわかる。つまり両版ともpart2がロミオのパートであること、またpart3が組んで踊るパートであること、part4が混合のパートで、別々に踊る、組んで踊る、ジュリエットの踊りがみられることなど、一致する点である。part1は、ラブロフスキー版は組んで踊るパート、マクミラン版は別々に踊るパートと異なっている。

次ぎに、各パートごとに動きの内容を明らかにし両版を比較してみると、まずpart1(図2)のラブロフスキー版は、組んで踊るアダジオ系の動きが中心で、アラベスク(a)、パ・ド・ブレ(pb)、リフト(l)がみられ、ジュリエットのパートであることがわかる。一方マクミラン版はマイム中心のもので、歩く、走る、以外は運動として明確に判別できるものはみられなかった。

part2(図３)は両版ともロミオのみのパートで、動きの内容もジャンプ(j) とターン(t)やそれらの組み合わせから成り、テンポの速い動きで統一されている。その間ジュリエットは、どちらの版もポーズ(p)かマイム(m)であまり動かず、ロミオの動きが中心であることがわかる。このpart2については両版とも同じ動きの内容を持つものといえよう。

part3(図４)は作品構成上の山場にあたる。ラブロフスキー版ではリフト(l)、アラベスク(a)、パ・ド・ブレ(pb)、ランニング(r)、ターン(t)、ポーズ(p)などが短い周期で目まぐるしく展開し、中間部にロミオの動きが少し組み込まれている以外はすべて組んで踊る形式である。特にリフト(l)は頻繁にみられ、全部で6回行なわれる中でも、3回目と6回目のもの(図６)は曲の盛り上がりと共に高く、実動時間も長く行なわれている。その他のリフトも図６のいづれかと同様であった。一方マクミラン版は、 前半はリフトとリフトの間にジュリエットのターン (t),アラベスク(a)、などが組み込まれるロンド形式で、後半はリフトとリフトの間にマイム(m)が組み込まれているロンド形式になっている。リフト(l)は合計8回と多く、いずれも移動を伴うものや回転を伴うもの、高いレベルのもや低いものと、8回の全てが形の違うものである。(図７) しかし、曲の盛り上がりの部分にはマイム(m)が当てられ(244sec,274sec,)ており、後半になるにしたがってマイム(m)の部分が増える傾向にある。この点がラブロフスキー版と

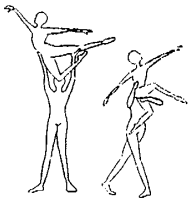
図7 マクミラン版のリフト



大きく異なるところであり、特にラブロフスキー版にはあまり見られないロミオのマイムがマクミラン版では多く、後半のほとんどがマイムで占められていて、この間ジュリエットは速いテンポのステップ(s)を行ない、別々に踊るパートになっている。

part4(図５)のラブロフスキー版はリフト(l)、アダジオ(a)以外はロミオとジュリエットがユニゾンで動いていることがわかる。動きの内容はジャンプ(j)、ランニング(r)、ポーズ(p)で二人が同時に同じ動きを行なっている。終盤は、マイム(m)、アラベスク(a)、ポーズ(p)とゆっくりとしたものに変化し最後はポーズをして終わっている。マクミラン版はpart3の延長でリフト(l)とマイム(m)が中心で、最後にジュリエットが走り(ｒ)ロミオが歩き(w)二人別々のポーズで終わるという構成になっている。

図６ラブロフスキー版のリフト



4，まとめ

今回の研究結果から、両版とも踊りの形態、作品の構成については大きな違いは見られず、それぞれ音楽の構成に沿った作品の組み立てと、それに合わせた踊りの形態であることが明らかになった。しかし、動きの内容にはそれぞれの特色がうかがえた。ラブロフスキー版は、パ・ド・ブレとマイムが全体の動きの10%以下であることと、単独のステップが使用されていないことを除けば、その他の動きは全て10%～20%の割合で出現し（ジャンプとターンは合わせて）平均的に使用されていた。特に、part4にこの版の特色が顕著に表れている。つまり、part3で作品の山場をリフトを中心に動いた後、part4の作品の終末に向けてもなお動きを抑えることなく、ジャンプや走りを使用したユニゾンを繰り返しおこなって、飽くまでも動きを駆使するという姿勢がうかがえる。このラブロフスキー版における振り付け上の特色は、作品を通してみられる淀みない多様な動きの展開にあるといえよう。

一方マクミラン版の特色は、マイムを主軸にした動きの構成にあるといえよう。どのパートにも必ずマイムがみられ、特にpart1は全編を通してマイムが貫かれている。また、part4にも長いマイムがみられる。ロミオのマイム・パートが頻繁にみられるのも特色である。しばしばマクミラン版が踊り手二人の名前で呼ばれる事があるが、それは作品のでき映えが主役の演技力(マイム)に拠るところからきているもであろう。

以上が今回得た結果であるが今後もひきつづき他の版をみていきたいと考える。

（注）

1) 野崎よし夫 ﾛｼｱ･ﾊﾞﾚｴの黄金時代 p.154 1993 新書館市川雅 ﾊﾞﾚｴ p.49 1994 別冊太陽 平凡社
2) 長野由紀 咲き続ける愛の花 p.55 1993 ﾀﾞﾝｽﾏｶﾞｼﾞﾝ10 新書館
3) 長野由紀 咲き続ける愛の花 p.54 1993 ﾀﾞﾝｽﾏｶﾞｼﾞﾝ10 新書館
4) ｹｲｺ･ｷｰﾝ ﾊﾞﾚｴ101物語 p.200 1992 ﾀﾞﾝｽﾏｶﾞｼﾞﾝ編

集部 新書館

5) divertissement;余興の意味、物語とは直接関係のない踊りのこと

6) pas・de・deux;二人の踊りのことで普通は男女で組む、グラン・パ・ドゥ・ドゥと同じ意味

7) 長野由紀 ロミオとジュリエット p.60 1995 バレエ・ダンスのきょう宴 洋泉社

8) 市川雅 バレエ p.49 1994 別冊太陽　平凡社

9) encheain ment動きの構成・流れ

10) ケイコ・キーン．バレエ101物語 p.203 ダンス・マガジン編集部．新書館

参考文献

1. 市川雅　ダンスの20世紀　新書館
2. ジョン・ローソン バレエのサイエンス 大修館
3. 三浦雅士．バレエピープル101 ダンスマガジン編・新書館